佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（三）

――東熙市と鄭享綬――

河野龍也

一　革命党の夢を追う旅

『南方紀行』（一九二二・四、新潮社）に案内役として登場する〈鄭〉とは、一体どんな人物だったのだろうか。彼は作中にフルネームが明かされておらず、従来の研究でもその実像に迫る手がかりは一切見出されてこなかった。〈打狗で歯科医を開業してゐる中学時代の旧友東君の書生〉、〈姉夫婦を手頼つて今は打狗に居るのだが、厦門の生れで厦門の中学校を出た男〉、そして養元小学校の校長〈周〉とは〈中学時代の同窓〉であるということ――『南方紀行』から窺い得る〈鄭〉の経歴はこれだけである。

しかし今回の調査で、朧気ながら〈鄭〉の実像が見えてきた。鄭享綬（ていきょうじゅ）――というのがその人の名である。彼は厦門港に浮かぶ鼓浪嶼（コロンス）の尋源中学出身で、養元小学校長・周坤元とは同窓の仲、東熙市（ひがしきいち）のもとで助手として修業し、一九三〇年代には市区改正成った厦門中山路の一等地で歯科医院を開業している。これらの経歴の大枠は、『南方紀行』その他の文章で春夫が回想する〈鄭〉の断片的な情報と正確に一致するのである。

『南方紀行』に現れる現地情報の多くは、英語による〈鄭〉の饒舌な解説によってもたらされたものである。したがって、〈鄭〉の素顔に迫ることは、春夫年譜に新たな伝記情報を付加するだけでなく、作品成立の根源を問い、『南方紀行』の記述にいかなるバイアスが働いたのかを明らかにすることでもある。興味深いのは、鄭享綬が中学時代、孫文支持の南方派として周坤元とともに袁世凱政権の顚覆を

図る革命党の協力者だったことである。しかも厦門の反袁闘争の中心には、中華革命党福建支部の許卓然が名を連ねていた。すでに確認したように、この許卓然こそ、『南方紀行』で有徳の士として称揚される〈許督蓮〉のモデルである。

果たして〈鄭〉が鄭享綬であり、〈周〉が周坤元であるならば、二人の協力のもとに行われた春夫の厦門旅行は、少年時代に危険を冒して革命に身を投じた若き活動家たちの人脈をたどる旅だったのだ。『南方紀行』が南軍の驍将〈許督蓮〉を理想化し、その悲劇に多くの紙幅を割いたことは、春夫を取りまく情報提供者たちが許卓然配下の少年革命家であり、彼に特別な思い入れを持っていたことと無縁ではない。そして春夫が南軍最前線の地・漳州を見物することに強い執着を見せたのも、彼らとの交流を考えれば容易に説明がつくのである。

鄭享綬の名が浮上してきたのは、やはりこれまでほとんど知られてこなかった東熙市の経歴を調査する過程においてであった。本稿ではまず東の経歴を詳述し、そこから鄭享綬の人物像へと順を追って考証の過程を紹介したい。情報の典拠は公文書や回想録などの文献資料に基づき、可能な限り年代の正確さを期したが、知り得た内容はまだごく一部に過ぎない。この種の調査はどこまでも中間報告にしかなり得ないが、現段階で判明した情報をまとめ、今後の考証の足掛かりを用意しておきたいと考えるのである。

二　東熙市経歴（人物誌二）春夫訪台以前

東熙市は、一八九三（明治二六）年二月二二日、父常三郎、母きしの四男として、三重県南牟婁（むろ）郡尾呂志村の名家東家（酒造）の分家「裏地家」に生まれた。春夫とは新宮中学時代の同級生で、一九一〇（明治四三）年三月卒の第五回生である。四月、東京歯科医学専門学校予科入学。九月、本科進学。規定の三年間の課程を順調に進級して、一四（大正三）年一〇月、第二〇回生として卒業した（一）。

佐藤春夫とは、上京後も深い交流があったらしい。春夫自身、東について、〈自分の中学校の同窓、在校中の親友で卒業後も同じく上京して二三年の間は交際もあつた〉（二）と書いている。やはり中学卒業と同時に上京した春夫は、一時生田長江宅に身を寄せたあと、千駄木観潮楼前の下宿に移り、さらに東が住んでいた湯島新花町の下宿へと転居した。瀬沼茂樹の『日本文壇史』には、根津権現裏の貸家物件（超人社）に惚れこんだ生田長江が、少々高額なそこの家賃を工面するために、湯島の下宿屋で冷遇されていた春夫に共同出資を持ちかける場面がある。

そのころ（註・生田長江が「超人社」入居を計画した頃）、数え年二十歳（ママ）になった慶應義塾予科の学生佐藤春夫は本郷区湯島新花町に住んでいた。本郷座の座方をしている大阪人夫婦の二階四畳半を月十五円で借りて、下宿をしていた。中学の同級生で、水道橋の歯科医専に通う東熙（ママ）市の世話であった。この家は芝居者らしく呑気なところがあるが、夫婦共に酒好きで、田舎の醸造家の息子で、大酒飲みの東に酒肴の用意をしておいて、そのお流れを頂戴することを、嬉しみにしていた。東に代った春夫には、このような飲酒癖がなく、堅い書生さんとか、野暮天とかいわれて、厚遇するところまでゆかなかった。所詮は大阪者の勘定高さであって、住心地がよいとはいえなかった。長江はこれをきき知っていた。新宮の豊かな医家のおん曹司で、上京すると、長江宅にしばらく滞在したことのある佐藤春夫こそはと、白羽の矢をたて、湯島新花町の下宿を訪ねた(三)。

春夫の慶應義塾予科入学は一〇年九月、超人社への転居は一一年六月頃である。この話が事実とすれば、それは一一年前半頃のこととなる。

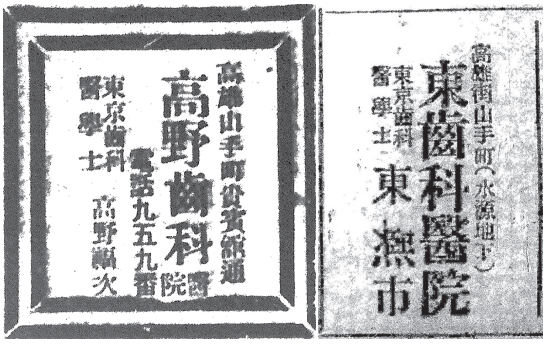
歯科医専を卒業した東は、一九一四年一一月一八日付で日本歯科医籍第二二七三号を取得(四)、そのまま台湾基隆打狗歯療院（未詳）に赴任する(五)。一八（大正七）年の初めに打狗で開業(六)。山形籍の小林ミサヲ（一八九九年五月生）と出会い、二〇（大正九）年三月に婚姻を届け出る。この前後、〈医院を新築してその費用の補助を一族に仰ぐために帰省した東は、六月、神経衰弱の療養中だった春夫と偶然にも新宮で再会し、彼を台湾へと誘った(七)。

出発は、二〇年六月下旬。広島の兄弟（長兄恒一か）を訪ね、下関から備後丸に乗船して、七月六日基隆着。午前中は港外社寮島の琉球集落で涼風を楽しみ、午後は熱暑の下を汽車で台北に移動。総督府博物館で春夫を森丑之助に引き合わせ、夕方の汽車で台北を発ち、七月七日朝、打狗に到着した。

新垣宏一の「台湾文学艸録」には、当時の東家の様子が次のように記されている。一九三八（昭和十三）年、春夫渡台から十八年後の聞き取りに基づく記録である。

当時のことを覚えてゐられる高野医師の談によると、東氏もずゐぶん変つた人であつたらしく、春夫と毎日酒を飲んでよろしくやつてゐたらしい。ずゐぶんあの奥さんも困つたやうであつたが、それでもあの奥さんは偉かつたなどと言はれる。此の小さな子供といふのが娘さんで、今では成人してフランスあたりに居られる筈だとのこと。東氏は後に南洋方面に行かれて消息

をたつたが、奥さんは未だ島内にゐられる筈である。奥さんが一番此の頃の東氏対春夫の日々の生活を知つてゐる――などと私に語られた。／この他に春夫の文にない興味ある話を知り得たが、それは当時の春夫の気持を考察した時すべてが自然のことであつた。（略）／高野歯科医師の談を聞くと、陳といふ旧城の金持が東氏の家へよく遊びに来たことはたしかで、何でも東氏はこの陳から金を借て家の設備をしたやうだと言はれた。とにかく、この陳は東氏、春夫等と同じ位の年輩で、性質も面白かつたといはれる。よく三人で飲み廻つたりするくらゐ気があつたらしい（八）。



❶『台南新報』掲載の広告。高雄（打狗）の東歯科（右:1921年6月20日7面）は、ほどなく高野福次に譲られた（左:1923年1月11日3面）。

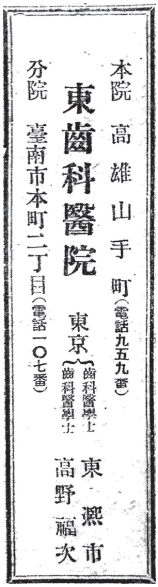
豪放磊落な東の性格と、当時の家庭の雰囲気がよく分かる貴重な記録である。このとき熙市・ミサヲの間には、長女てる（二〇年二月一八日生。生後四ヶ月半）が生まれており、春夫の回想によれば、隣家に従兄も住んでいたらしい（九）。また医院の従業員には〈鄭〉のほか、春夫の文章には登場しない〈高野医師〉（後述する高野福次）もいたことが分かる（一〇）。そして〈世外民〉のモデルとなった陳聰楷が東家に出入りしていたのは、医院新築時の出資人の一人だったからだということも窺われる。

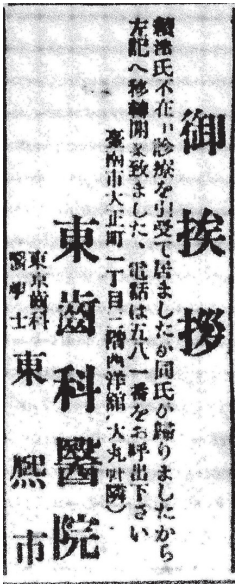
子育てに追われる新婚家庭で、酒豪の夫が旧友を連れ込み、二ヶ月半も逗留させて酒盛りをしたのだから、饗応にあたったミサヲの苦労はひとかたでなかっただろう。のみならず、東と春夫のふるまいには、何か相当奔放な所があったと見え、ミサヲへの同情を語る高野医師の言葉が、新垣の文章では思わせぶりに強調されている。その奔放な生活の内実については不明だが、ともかくも春夫は、熙市とミサヲの心づくしによって南国の夏の風情を満喫し、鳳山や台南、そして福建省にまで遊び、創作の糧を得ることができた。そして九月中旬、春夫は一家に別れを告げ、一路北を指して台湾島縦断の旅に出る。旅の終りは台北の森丑之助宅で過ごし、内地行の汽船で基隆を出港したのは、一〇月一五日のことであった。

三　東熙市経歴（人物誌二）春夫訪台以後

その後東一家はどうなったのか。ここからは主に『台南新報』と東京歯科医学専門学校発行の『歯科学報』人事欄、および各種報告書名簿類を参照しながら一家の足取りを追うことにしよう。

一九二一（大正一〇）年六月下旬、台南の歯科医で、歯科医専後輩の続渉（つづきわたる）が博士号取得のため留学（米国イリノイ大）（一一）。その院務を引き受けることになり、高雄（二〇年九月より、打狗を改称）山手町を本院（電話九五九番）、台南市本町二丁目を分院として（電話一〇七番）、本院の業務を高野福次に委ねた（❷）。台南に移ったものの、当初は飽くまでも留守預かりのつもりだったらしい。それは翌年元旦の台湾歯科医師会年賀広告に、〈高雄　東熙市〉として名を連ねているところからも分かる（一二）。ところが二二（大正一一）年一二月、続渉が帰還しても、東は高雄に戻らず、台南市内に改めて東医院を開業している。場所は大正町一丁目の大丸軒隣というから、台南州庁真向かいの市内中心地。三階建ての西洋館であった（電話五八一番呼出）（❸）。譲渡か貸与かは不明だが、高雄の本院はそのまま高野歯科医院に引き継がれた（一三）。新築間もない高雄の医院からなぜ台南に移ったのかは、東の経歴中の大きな謎である。だが、後進のために心を摧く情に厚い性格や、従来の生活に囚われない果断に富んだ身の処し方などから人柄が窺われてくる。


本院　高雄山手町（電話九五九番）
東歯科醫院
東京（歯科醫學士）東熙市
（歯科醫學士）高野福次
分院　臺南市本町二丁目（電話一〇七番）

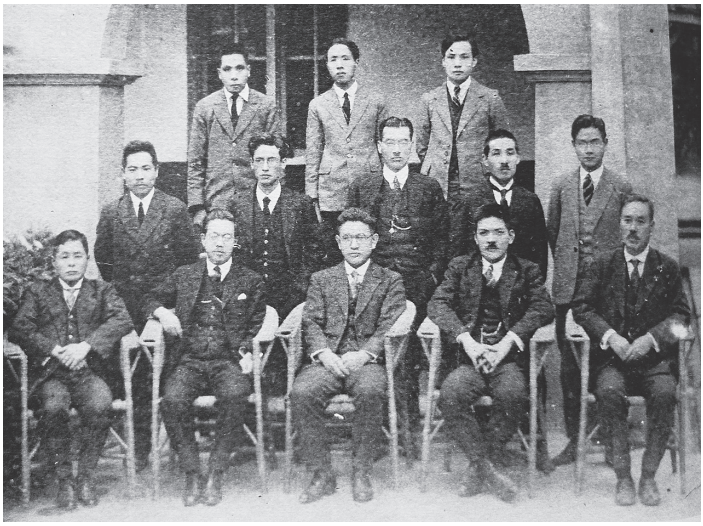

御挨拶
類港氏不在ニ診療ヲ引受テ居ましたが同氏ガ歸りましたから
左記ヘ移轉開業致ました、電話は五八一番をお呼出下さい
臺南市大正町一丁目二階西洋館（大丸軒隣）
東歯科醫院
東京歯科醫學士　東熙市

❷ 右『台南新報』1921年9月3日12面
❸ 左『台南新報』1922年12月5日1面

台南に移った東歯科はしかし、長くは存続しなかった。一九二三（大正一二）年八月、東は招かれて、厦門博愛会医院に着任するからである。博愛会とは、台湾総督府の援助を受けて設立され、厦門（一九一八）、福州（一九一九）、広東（同）、汕頭（一九二三）の各地に病院を建設し、医療援助を行っていた。厦門医院の所在地は、共同租界の鼓浪嶼。厦門市街から渡し船で十五分、上陸点である龍頭桟橋のすぐ隣に立地していた。総督府の対岸政策と連動した

いわゆる文化事業の一環であり、医師は総督府の技官・技手という名目で任命された。東も赴任時の身分は台湾総督府警務局衛生課技手である。

歯科部門新設に伴う東の招聘は、同会事業報告では三月二九日付になっており、もとは三ヶ月の臨時採用だったらしい（一四）。それが八月までずれ込んだ理由は、この三月下旬から、厦門の対日感情が急速に悪化し、日本製品の陸揚げ拒否など、かつてない規模の深刻な排日運動が夏まで続いたことと関係があるかも知れない。一方、台南の東歯科が閉院となった詳しい時期は不明だが、『台南新報』に広告が見える五月八日過ぎまでは台南で診療を続けていたものと思われる（残念ながら、『台南新報』は六月分が散逸しており、確認できない。七月以降、東歯科の広告は途絶える）（一五）。



❹ 1925年、『厦門博愛会医学校第一回卒業紀念誌』口絵（外交史料館蔵）。講師（10名）及び卒業生（3名）。二列目左端が歯科副医長33歳の東熙市。

「大正拾参年度厦門博愛会事業成績報告書」の職員一覧表には、〈歯科副医長　東熙市　医学生教務歯科学担任〉の名が見える。そして注目されるのは、新設された歯科のスタッフとして、〈歯科雇　鄭享綬〉の名も見えていることである（一六）。鄭享綬を『南方紀行』の〈鄭〉と考える根拠は二つあるが、一つ目がこれである。翌年七月発行の小冊子『厦門博愛会医学校第一回卒業紀念誌』によれば、鄭の着任は二三（大正一二）年一一月で、東に遅れること三ヶ月（一七）。このことは、八月から三ヶ月臨時職員として勤めていた東が正規採用されるにあたり、厦門出身で土地勘のある鄭を、助手として呼び寄せたことを示しているのではないか。

❺ 木板に描かれた油絵。裏に〈支那厦門 佐藤春夫〉と朱筆の署名がある（330×241mm、佐藤春夫記念館蔵）。

東は厦門博愛会医院に六年間奉職した。同院の報告書によれば、二八（昭和三）年、台湾総督府技師として医長に昇格、従七位に叙せられ、博愛会理事に就任。同年六月一五日、汕頭・香港・広東に向け視察旅行（一八）。二九（昭和四）年八月十三日、帰府命令を受けて台湾総督府に出府。同九月三日より一ヶ月の予定で東京出張。そして九月三〇日をもって依願退職した（一九）。この間、二六（大正一五）年七月二八日に鼓浪嶼で長男敏男が誕生している。

桂川正秋（経歴未詳）の随筆「太鼓の音と風の音」（『緑りの毛氈』所収）には、博愛医院在任時代の東のことが、次の文中にわずかに登場する。

私は或る年の冬を南支那厦門の鼓浪嶼コロンスと呼ばれる風光明媚な小島に遊んだ。（略）中央丘陵の大岩塊には『天風海濤』の四大文字が彫刻されてゐる……此れには鄭成功と離れられない伝説が有つた。（私は厦門の事を又鄭成功の事を何かに精しく書かうと思つてゐる）佐藤春夫氏は此処で幾枚かのスケツチをして帰られたさうだ。其の佐藤氏を宿した日氏は未だ此処に居られる。田辺尚雄氏も亦音楽行脚の道に立寄られたとか。芸術家よ。（ママ）！一度は此の美しい鼓浪嶼を訪ひ呉れ給へと云ひたい（二〇）。

「天風海濤」の四大字は、鼓浪嶼最大の巨岩である日光岩に刻まれた磨崖刻石で、その威容は今も昔と変わらない。厦門の風景を描いた春夫の油絵が現在一枚のみ伝わっており（❺）、荒々しい岩肌と瀟洒な洋館の屋根を取り合わせた構図はいかにも鼓浪嶼らしい風景の縮図である。東から直接話を聞いたらしい桂川の書きぶりからすれば、春夫が描いたのは日光岩の附近であった可能性が高まるが、一方でこの文章には訛伝もあり、決定的とまでは言えない。東が打狗で春夫を世話したことと、春夫が厦門に旅したことが混同されているからである。

一九三〇（昭和五）年一月、博愛医院退職後の東は、鼓浪嶼東部、外国人運動場に近い洋墓口に独立開業してい

る(二二)。このことは、同年発行の『厦門指南』によっても確認できるが、医院の正確な位置までは今の所分かっていない(二三)。一九三二(昭和七)年一月一七日、次女清美が誕生。しかし厦門での新規開業はうまく軌道に乗らなかった。というのも、一九三一(昭和六)年九月以来、満洲事変の影響で、在華日系企業や病院は激しい排日運動に曝されたからである。三二(昭和七)年末、とうとう東は厦門を見限り、新天地を求めて香港に渡った。そして東京歯科医専の同期卒業生で、山崎歯科医院を継いでいた下川憲久を頼って働き始める(二四)。一九三五(昭和一〇)年の名簿によれば、東は市内グロセスタービルに居住。そこから隣のクイーン通三四番地ペダービル六階の山崎医院まで通勤していたものと見える(二五)。また、三四(昭和九)年二月二三日、二男靖男が台北で生まれたことからすると、家族は台湾に帰し、香港へは単身赴任だった可能性が高い。

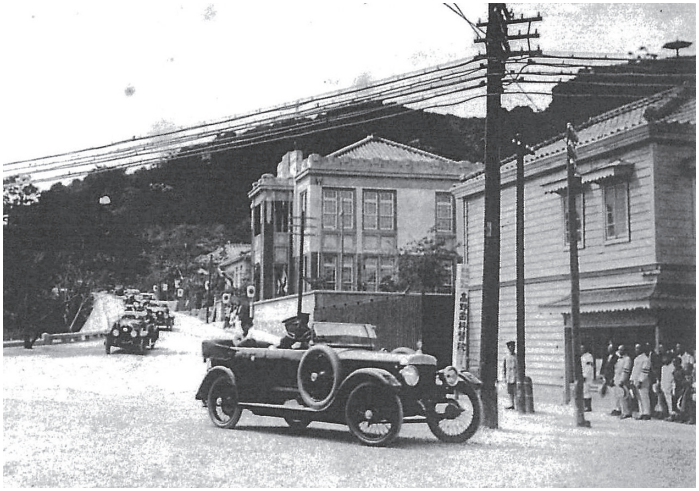
その後の東の足取りはまだよく分かっていない。前掲一九三八(昭和一三)年の新垣宏一「台湾文学艸録」によれば、〈小さな子供といふのが娘さんで、今では成人してフランスあたりに居られる筈だとのこと。東氏は後に南洋方面に行かれて消息をたつたが、奥さんは未だ島内にゐられる筈である〉(二六)。また、一九三九(昭和一四)年の島田謹二「佐藤春夫氏の『女誡扇綺譚』」によれば、〈東氏は後に南洋Malacca(マラッカ)に赴いて今は消息を絶つてゐるといふ。文初に「やつとこの程這ひ出したといふ子供」(註・春夫「かの一夏の記」)とあるのは東照子さんのことで、故あつてしばらく独逸に赴き、今は在台せられてゐると伝へるものがゐる〉(二七)。これらの不確かな伝聞が、管見の限り文献上わずかに残された東の手がかりである(追記参照)。

日本の対外拡張期、決して一所に執着せず、驚くべき行動力で「外地」の最前線を目指し続けた東爬市は、一九四五(昭和二〇)年八月一六日、日本の敗戦を見届けるようにして、台湾台北州七星郡松山で世を去った。五十三年の波乱に満ちた生涯であった。

四　打狗東医院

一九二〇(大正九)年夏、春夫が二ヶ月半逗留した打狗の東家とは、どのような場所にあったのだろうか。最初に、春夫の回想「かの一夏の記」の中から東家に関する記事を抜書きしておこう。

Hは車窓から軌道に近い山麓を指す。朝日を浴びたその新築の一戸が彼の家だと知れた。停車場から僅に二三丁ばかりではあるが坂道になつてゐる。それだけに南方に町全体を見晴したい場所である。屋後は山



❻ 1923年4月21日の貴賓館道路。標柱に「高野歯科医院」と見える。中央洋館風の建物が高野医院（旧東歯科）か。後に寿旅館となり、手前の塀内に和館が増築される。（『高雄州行啓記念写真帖』11頁）。

つづきに果樹などを植ゑたところへ、見てゐるうちに鹿とそつくりで小形なのが出て来る。どんな字を書くのかキョンといふ動物だといふ。樹の芽を食つていけない奴だがまあ遊ばして置いてやらうとHは面白がつてゐたが急いで飛び下りて追ひに行つたから、聞くと隣の従兄が昨年故郷からわざわざ送らせた蜜柑の樹に花がついてゐるのをやられるといふのであつた。さすがに庭までは下りて来ないがこの山には、猿が沢山住んでゐる。旦暮、群をなして峰から峰を渉つて歩く、その長い行列が四五丁もつづいてゐる時もある。（略）外国人はこの山を猿山と呼んでゐることは後に偶然知つた。

〈南方に町全体を見晴したいい場所〉にあったという東家は、今の高雄市のどのあたりの方角になるのか。一九一三（大正二）年打狗生まれの新垣宏一の調査記録が、ここでも貴重な情報を提供してくれる。

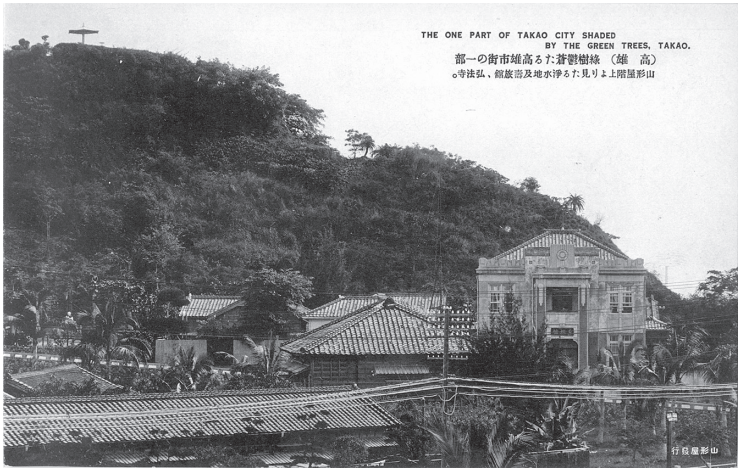
高雄に古くから住んでゐられる方は、その頃浄水地の下、湊町方面を南に見渡す例の貴賓館道路の入口近く（現在寿旅館のあるところ）に同氏の医院のあつたことを記憶されるであらう。あの東氏が、此のH氏であり、あの山麓の東氏宅こそ、かの一夏の幾日かをわが佐藤春夫が過した家であり傑作「女誡扇綺譚」の想を案じた（?）紀念すべき場所であつた（二七）。

貴賓館道路とは、一九〇九（明治四二）年、皇太子（大正天皇）行啓の計画があった折、打狗山中腹に建設された宿泊所に通じる道のことである。このときの行啓は実

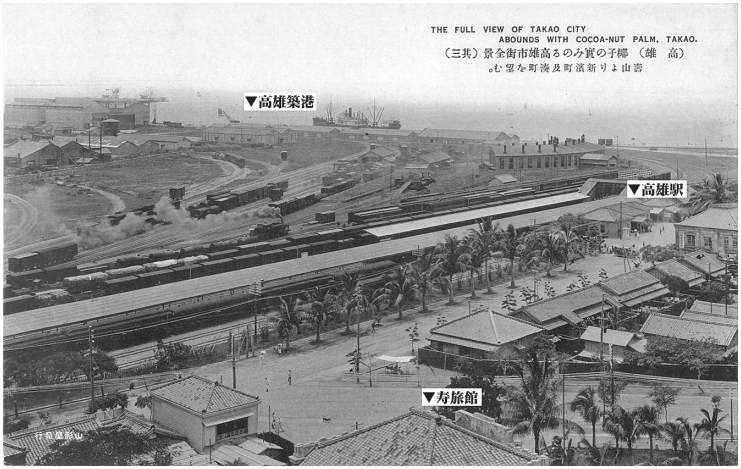
現せず、建物はそのまま貴賓館として使用されていたが、一九二三（大正一二）年の皇太子（昭和天皇）行啓の折に増築され、四月二一・二二日両日の宿泊所となった。この際、皇太子の命名で打狗山（高雄山）は寿山と改称され、貴賓館ものちに寿山館と呼ばれるようになった。春夫のいう〈猿山〉とはまさにこの打狗山＝寿山のことであり、貴賓館道路は現在の千光路――中山大学の学生がスクーターを飛ばしてせわしなく行き交う細い坂道のことである。

皇太子の行啓記念に出版された『高雄州行啓記念写真帖』には、貴賓館から視察に向かう皇太子の姿を捉えた二枚の写真が掲載されている（二八）。撮影日時は一九二三（大正一二）年四月二一日及び二二日、いずれも山下町の大通り（鉄道線路沿い）から西方向への上り坂となった貴賓館道路入口附近を写したものである（❻は前者）。角の電柱から少し奥の板塀脇に、台南に移った東歯科に代わって開

❼ 木谷佐一編「大日本職業別明細図 No.180 高雄市」（1929.11　東京交通社）の一部。



❽ 1928 年頃の貴賓館道路（南から撮影）。絵葉書の説明には、〈緑樹鬱蒼たる高雄市街の一部　山形屋階上より見たる浄水地及寿旅館、弘法寺〉とある。右側の洋館に「寿旅館」の額が懸り、左側の庭には仏像らしきものが見える。山上に傘状の構築物のあるところが浄水池。



❾ 旧東医院裏手の寿山から、新浜町、湊町方面を眺める（1928 年頃）。

業したばかりの高野医院の標柱が見えるが、それ以外は二年半前の春夫滞在時とほぼ変わらない光景であろう。

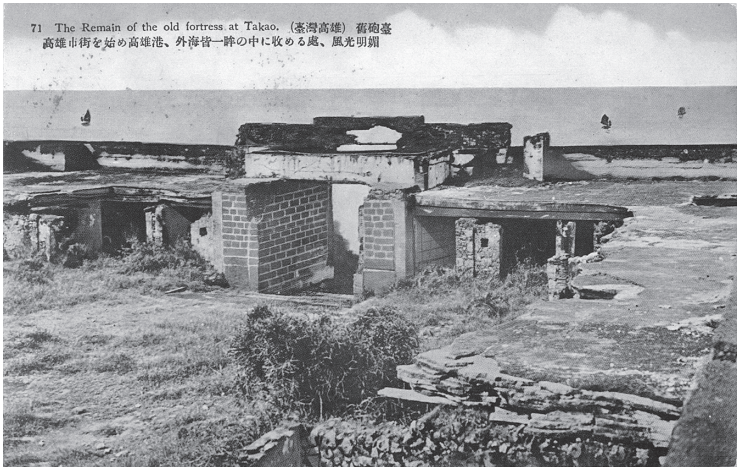
問題は、どの建物が東医院（高野医院）だったかである。一九二九（昭和四）年の商工地図には、貴賓館道路入口から順に、「寿旅館」「高野歯科医院」「高野山」（弘法寺）の三軒が描かれている（❼）。この場所を正面から写した同時期の絵葉書を見ると（❽）、右側の坂下から順に、①洋館の家、②日本家屋、③庭付きの日本家屋の三軒が見える。①の玄関には「寿旅館」の額が見え、③の庭には仏像らしいものが写っていることから、高野医院は②の日本家屋に該当すると考えられる。だが、いかにも病院らしく異彩を放った①は、東医院と無関係なのだろうか。「寿旅館」は一九二八（昭和三）年三月の開業（翌年までに和館を増築）で（二九）、それ以前の洋館の用途は、今もって謎である。あるいはこの洋館こそ東医院の所在地で、高野医師に引き継がれてから寿旅館に譲られたのではないか。高野医師は東の従兄が住んでいたという隣家を医院として診療を続けたとすれば辻褄があうが、無論これは推測の域を出ず、今のところ①か②が東医院であったという以上のことは分からない。

春夫が打狗で旧友と至福の時間を過ごした場所をこうして探ってみると、北側は険しい打狗山が里に接してなだらかな傾斜を描いた山続きの庭であり、南側は打狗駅や埋立地に出来た湊町の商店街、そして高雄埠頭の海景をはるかに望む好立地の家だったことが分かる（❾）。明るく開け

たこの場所はしかし、太平洋戦争末期に米軍の空爆を受けて破壊された。今では往時の面影を残す建物はなく、寿山の山容だけが昔を偲ぶよすがである。二〇一一年二月にここを訪ねると、千光路は崩れた民家が立ち並ぶ埃っぽい坂道であった。桑海の変というほかはない。そして最近老朽家屋を取り壊した殺風景な空地には、工事の際に出てきたという観音坐像を刻んだ墓石がぽつんと一基残されていた。高野山布教所の遺物が今ごろになって出てきたのであろう。

五　鄭享綬経歴（人物誌三）

『南方紀行』以外に〈鄭〉に言及した春夫の文章には、二種類のものがある。「かの一夏の記」（『霧社』所収）と、「暑かつた旅の思ひ出」（連載随筆「羈旅つれづれ草」『世界の旅・日本の旅』一九五九・一〇）である。前者には、打狗旗後街の砲台跡から街へ降りていくと、〈日の弟子で技工の手伝をしてゐる某といふ本島人〉が、〈家のなかへ呼び入れて杏仁のお湯などをくれ〉たこと、〈時には自分の案内を口実に附近の芸者屋などへつれて行〉ったことなどが述べられている。後者はその芸者屋見物の一件について詳しく、〈鄭〉が春夫の同意を得ると大喜びで芸者屋に駆け込み、麦酒を鯨飲したあと別室に倒れて女と相擁していたこと、そして先に帰ろうとする春夫に追いすがり、今見たことを先生（東熙市）には秘密にしておいてほしいとしお



⑩ 廃墟となった打狗旗後街の砲台跡。新市街対岸の砂洲上にあり、渡し舟で渡る。

らしく囁いたことなどが述べられている。〈いつも神妙に見える鄭が、この夜は妙にはしやいで、脚下の彼自身の影と相擁して踊るやうな浮かれた足どりで急ぐのである。変に昂奮する奴であつた〉という春夫の感想には、〈鄭〉への親しみと懐かしさがあふれている。

さて、この〈鄭〉が鄭享綬という人物であった可能性については二つの根拠がある。一つは前述の通り、東熙市が厦門博愛会医院に赴任したとき、助手として呼び寄せたのが鄭享綬だったこと。もう一つは、春夫と〈鄭〉の宿泊先となった鼓浪嶼の養元小学校長・周坤元と、鄭享綬とが同級生だったということである。

二人が学んだ尋源中学（一八八一年創立）は、養元小学（一八八九年創立）の上位学校として卒業生を受け入れており、いずれも新教系の米国帰正会（American Reformed Church）が経営する先覚的なミッション・スクールであった。校長は米国人ピッチャー牧師で欧米人の教員もおり、この二人であれば春夫と流暢な英語で会話することが可能だったはずである(三〇)。〈鄭〉にクリスチャンの知人が多いことは、教会学校卒であれば納得でき、また集美学校で行われていたキリスト教のサマースクール（閩南激励団(三一)）で、〈鄭〉が陳鏡衡（士衡）と親しく話していた理由も見えてくる。陳鏡衡は一九一三（民国二）年開学当時の集美小学に赴任し、後に師範校医となっているが、それ以前は厦門の尋源中学で教鞭を執っていた(三二)。一九二〇（民国九）年現在〈二十四五の青年〉であったという周坤元と鄭享綬は、時期的に見て彼の教え子だった可能性が高い。

さて、厦門郷土史の記述中、鄭享綬と周坤元の名は意外な所に登場する。福建討袁計画を指導した中華革命党員の一人、丘廑兢（きゅうきんきょう）の回想録である(三三)。以下にその摘要を記しておこう。

中華民国成立後、臨時大総統として実権を握った袁世凱は、議院内閣制を主張し議会で国民党を勝利に導いた宋教仁を暗殺。孫文・黄興らの抗議活動（第二革命）をも斥けて、独裁体制を強化した。対する孫文は亡命先の東京で一九一四（民国三）年六月に中華革命党を結成するが、厦門でも早速これに呼応する動きが起こる。すなわち叶（葉）青眼、許卓然、陳金芳らは、比律賓（フィリピン）中華革命党を通じて孫文から厦門支部設立の指示を受けたのである。党員勧誘は福州・泉州にまで及び、福建地区の武装集団を取り込んで「閩南討逆軍」（のち福建護国軍に編入）が結成された。また、傅振基が尋源中学、陳金芳が英華書院、周駿烈が迴瀾書院で宣伝活動を展開し、これらの学校を中心に学生組織も作られていく。

中華革命党厦門支部は、討袁武力闘争に備えて武器・弾薬の調達を進め、また爆弾製作をも急いだ。同時に一九一五（民国四）年七月には、日本の対華二十一ヶ条要求を受け入れた袁世凱政府を糾弾する寓意劇「亡国鏡」を上演して、市民の啓発と資金調達を図っている。

しかし、武力闘争の経過は思わしくなかった。「閩南討逆軍」の中継点である山口廟が政府軍に攻略されたことで、それまで寨仔湖にあった大本営を天柱山に移さざるを得なくなり、また一九一六（民国五）年五月二七日の同安城総攻撃では、幹部潘節文・庄育才の二名を含む数名の戦死者を出して撤退している。報仇の意志を益々固くした革命党は、次に「厦門起義」を計画し、政府の逮捕権が及ばない共同租界の鼓浪嶼でその準備に取り掛かる。この頃、学生軍の志願者が続々と運動に身を投じるが、その中に周坤元と鄭享綬の名が認められるのである。

就在这时候、各方面来的人日多、学生方面参加革命的更形踊跃！ 记得当时寻原（ママ）中学参加的有：邵庆元、周坤元、朱鸿谟、邵仁敏、郑亨（ママ）绶、王保元等；迴澜书院学生参加的除周骏烈、陈兆麟外、环有郑炳辉等；英华书院参加的学生也不少。（一三三頁）

その計画とは、総司令を叶青眼、学生軍指揮及連絡担当を朱震、敢死隊及民軍指揮を趙剛、学生軍誘導及連絡担当を周駿烈とするもので、学生軍の任務は、電話会社、電燈会社、中国銀行の制圧。その間、民軍及敢死隊は鼓浪嶼から厦門に上陸し、思明県政府と道尹公署を占領して、予め内通しておいた駐厦政府軍の下級軍官がこれに応じて蜂起するという筋書であった。決行は一九一六（民国五）年二月二日午前一時。

ところがこの計画は、軍事会議に紛れこんでいた内偵によって事前に露顕し、頓挫する。内偵の連絡を受けた李厚基は直ちに袁世凱に報告、袁は上海海軍総長・劉冠雄に指令を出し、二月一日早朝、陸戦隊を満載した軍艦二隻が厦門に派遣されてきたのである。形勢不利と見た革命軍は計画を断念し、同志は各地に帰還して行った(三四)。

春夫によれば、〈鄭〉は姉夫婦を頼って打狗に渡ったということであるが(三五)、鄭享綬が実際どのようにして東熙市と知り合ったのかは今のところ把握できていない。確かなのは、鄭が一九二三（民国一二）年一一月から厦門博愛会医院の歯科雇として東熙市のもとで働き、一九二八（民国一七）年度中に同院を辞職(三六)、その後一九三一（民国二〇）年には思明南路で鄭享綬牙科を経営しており(三七)、翌年には中山路門牌一四に同牙科があったということだけである(三八)。その後の商工名簿類から彼の名は見いだせず、消息は不明である。

春夫が語る〈鄭〉の姿はややコミカルに戯画化されたものである。だが、鄭享綬が『南方紀行』の案内役であるとすれば、彼は春夫と出会うわずか四年前、決死の覚悟で反袁闘争に身を投じた革命学生の一人であった。このとき同志として共に働いた記憶は、周坤元との堅い絆となっていたはずである。往時を語る二人の談話の中には、当然革命運動当時の逸話も含まれていただろう。『南方紀行』で〈許督蓮〉（許卓然）が称揚されていることの裏側には、周と鄭との無念の思いがわだかまっているのである。換言すれば、実行間際に幻と消えた「厦門起義」の夢の余燼が、春夫に「漳州」の一章を書かせたのだとも言えるのである。

（待続）

付記

調査の過程で、東熙市ご長男敏男氏とお話しすることが叶いましたのは、この上ない僥倖でした。東熙市一家の家族歴の一部および所蔵資料（図5）の掲載に関しては、新宮市立佐藤春夫記念館にご教示と格別なご配慮を賜りました。本稿は皆様方のご厚意の賜物と謹んで感謝申し上げます。

文献調査では、日台交流協会、台湾協会、外務省外交史料館、台南市立図書館に多大な便宜を与えられました。記して謝意にかえたく思います。

なお本研究は、ＪＳＰＳ科研費 22720078 の助成を受けたものです。

註

一　東京歯科医学専門学校編『東京歯科医学専門学校総覧』（一九一五・一〇）、八七頁。

二　佐藤春夫「かの一夏の記」（『霧社』一九三六・七、昭森社、二五三頁）。

三　瀬沼茂樹『日本文壇史一九 白樺派の若人たち』（一九七七・一一、講談社）、二五一頁。

四　日本歯科医師会編『日本歯科医籍録』（一九三〇・八、歯苑社）、一五二頁。

五　〈台湾基隆打狗歯療院へ赴任せらる〉（『歯科学報』一九一四・一二、六九頁）。

六　〈台湾打狗に開業せられたり〉（『歯科学報』一九一八・二、八〇頁）。

七　佐藤春夫「かの一夏の記」（『霧社』一九三六・七、昭森社）、二五三頁。

八　新垣宏一「台湾文学艸録（十八）佐藤春夫のこと」（『台湾日報』一九三八・一一・三）、四面。同（十九）（『台湾日報』一九三八・一一・五）、四面。

九　佐藤春夫「かの一夏の記」（『霧社』一九三六・七、昭森社）、二五五頁。

一〇　ただし、前掲『日本歯科医籍録』によると、高野福次の東歯卒業は一九二〇年九月、歯科医籍取得（第六〇三一号）は二〇年一一月一〇日である（四〇三頁）。春夫とは入れ違いだった可能性もある。

一一　〈謹告／小生今般海外遊学の為め不日出発可致茲に平素の御交情を謝し乍略儀紙上を以て御挨拶申上候／尚小生留守中は生の先輩にして同窓なる東京歯科医学士東熙（ママ）市氏院務を司る可く生に倍する御厚誼を賜はらん事を奉願上候／六月二十日　続渉／辱知各位〉（『台南新報』一九二一・六・二〇、七面）。中西輝磨『昭和山口県人物誌』（一九九〇・四、マツノ書店）によれば、続渉（一八九三―一九八四）は熊本市生れ。東京歯科医専、イリノイ大を卒業。一九三九年下関で開業。維新史に関心があり、六一年より約二〇年にわたり長府博物館友の会会長を務めた。功山寺に高杉晋作像を建立し、著書に『日本の第四維新』（一九八〇・一、青山書房）がある（一八五頁）。

一二　『台南新報』（一九二二・一・一）、一五面。

一三　〈高雄山手町貴賓舘通／高野歯科医院／電話九五九番／東京歯科医学士／高野福次〉（『台南新報』一九二三・一・一一、三面）。

一四　〈三月二十九日　外科附属トシテ臨時施設シタル歯科治療ヲ開始ス（歯科医ハ台南市開業歯科医東熙市氏ヲ三ヶ月間ノ予定ニテ招聘ス）〉「大正十一年度厦門博愛会事業成績報告書」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015217600（第一八二画像目）、補助（病院、学会、民団、学校）／補助関係雑件 第二巻（H.4.0）（外務省外交史料館）。

一五　『台南新報』（一九二三・五・八）、一面。

一六　「大正拾参年度厦門博愛会事業成績報告書」B05015217700（第二二一画像目）、補助（病院、学会、民団、学校）／補助関係雑件 第二巻（H.4.0）（外務省外交史料館）。

一七　財団法人厦門博愛会医学校編『厦門博愛会医学校第一回卒業紀念誌』（一九二五・七、厦門博愛会）、二八頁。B05015217700（第二六四画像目）、補助（病院、学会、民団、学校）／補助関係雑件 第二巻（H.4.0）（外務省外交史料館）。

一八　財団法人厦門博愛会「昭和三年度事業成績並収支決算書」B04012788500（第一九一・二一一・二一六画像目）、本邦病院関係雑件 第一巻／四、博愛病院関係（在厦門）（I.3.3）（外務省外交史料館）。

一九　財団法人厦門博愛会「昭和四年度事業成績並収支決算書」

B05016194300（第四五・一八画像目）、参考資料関係雑件／支那各地博愛病院関係／厦門博愛病院　分割１（H.7.2）（外務省外交史料館）。

二〇　桂川正秋『緑りの毛氈（随筆集）』（一九二六・一〇、正秋叢書刊行会）、三二一・三四頁。

二一　〈台湾総督府技師として支那厦門博愛会病院歯科主任たりし同氏は官を辞して一月下旬より厦門鼓浪嶼洋墓口に独立開業〉（『歯科学報』一九三〇・三、一一一頁）。

二二　〈東歯科　日本　鼓浪嶼〉（陳佩真・蘇警予・謝雲声編『厦門指南』第九篇（歯科）一九三二・五、厦門新民書社、一二頁）。

二三　〈昭和四年台湾総督府技師を辞して以来南支那厦門に開業中なりし同氏は満洲事変後深刻なる排日と戦つてゐたが遂に厦門を見限り香港在住の同級生下川憲久（山崎歯科医院長）氏の許に勤務することになつた。Yamasaki Dental Office 6th Floor, Pedder Building, Hongkong〉（『歯科学報』一九三二・一二、一〇五～六頁）。

二四　〈Yamasaki Dental Office 6th Floor, Sedder Buildg. Hongkong. 東熙市（ママ）／Dr. K. Higashi, Gloucester Building, Hongkong.〉（赤尾酔仙編『日本歯科医師名簿』一九三五・一〇、日本歯科新聞社、二九九頁）。

二五　新垣宏一「台湾文学艸録（十八）佐藤春夫のこと」（『台湾日報』一八九三八・一一・三）、四面。

二六　松風子（島田謹二）「佐藤春夫氏の『女誡扇綺譚』―「華麗島文学志」―」（一九三九・九）、五三頁。

二七　新垣宏一「台湾文学艸録（十七）佐藤春夫のこと」（『台湾日報』一九三八・一一・一）、四面。

二八　『高雄州行啓記念写真帖』（一九二四・四、アイデア写真館）。

二九　中山馨・片山清夫『躍進高雄の全貌』（一九四〇・九）、三一一頁。

三〇　山口昇編『欧米人の支那に於ける文化事業』（一九二二・一二、日本堂）、一一五五頁。

三一　『激励団報告書』（一九二一、閩南基督教士激励団委辦）によれば、閩南激励団は聖書講読を中心とするキリスト教徒の夏季合宿で、春夫滞在時、第三回激励団が集美学校で挙行されていた。会期は一九二〇年七月二六日～八月一日。『南方紀行』「集美学校」章を参照。

三二　〈（姓名）陳士衡（字）鏡衡（籍貫）福建同安（職務）校医（資格）曾任尋源中学教員（入校年月）九年二月〉（集美学校文芸部編『福建私立集美学校校友会第一期雑誌』一九二〇・一〇、集美学校校友会、三〇頁）。〈（姓名）陳士衡（別号）鏡衡（性別）男（籍貫）福建同安（曾任職務）小学教員／師範校医（到校年月）二年一月（離校年月）十年二月〉（集美学校二十周年紀念刊編輯部編『集美学校二十周年紀念刊』一九三三・一〇、七六頁）。

三三　丘廑兢「閩南倒袁運動記」（中国人民政治協商会議福建省厦門市委員会文史資料研究委員会編『厦門文史資料』第九輯、一九八五）、一～二五頁。

三四　その後、第二次計画もあったが、一九一六（民国五）年六月に袁世凱が死亡。黎元洪大総統の元で臨時約法と議会が復活したため、孫文の命令で解散となった。旧福建護国軍総司令部は福建流籌部と改称し、厦門竹仔街に事務所を置いて許卓然が残務整理に当たった（「支那並支那人ニ関スル報告（第二十七報）」B03041649800（第三八五・三八六画像目）、台湾総督府政況報告並雑報 第一巻（B.1.5）（外務省外交史料館）。

三五　『南方紀行』では〈姉夫婦を手頼つて〉となっているが、「暑かつた旅の思ひ出」では、〈鄭の従妹〉で〈歯医者〉の〈細君〉となっている。

三六　前掲の財団法人厦門博愛会「昭和三年度事業成績並収支決算書」には鄭享綬の名が見えない。

三七　〈鄭享綬 中国 思明南路〉（陳佩真・蘇警予・謝雲声編『厦門指南』第九篇（歯科）一九三一・五、厦門新民書社、一二頁）。

三八　〈中山路（商号）鄭亨綬（ママ）（門牌）一四（営業）牙科〉（工商広告社編纂部編『厦門工商業大観』一九三二・六、厦門工商広告社、六二頁）。

追記

本稿校正中、東敏男氏より照子氏の渡航先はドイツが正しいこと、熈市氏はマラッカで閉院の後軍属となるも肺結核を発症。併発した腸結核により、台北の陸軍病院で逝去されたことをご教示いただいた。一九三八年一〇月末の『台湾医学会会員名簿』によれば、マラッカでの住所はブンガラヤ通一八四番地である。

（こうの　たつや・実践女子大学准教授）